

Title	Effects of professional oral health care on reducing the risk of chemotherapy-induced oral mucositis
Author(s)	齋藤, 寛一
Journal	歯科学報, 115(2): 150-151
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/3584">http://hdl.handle.net/10130/3584</a>
Right	

氏名(本籍)	齋藤寛一 (兵庫県)
学位の種類	博士(歯学)
学位記番号	第1952号(甲第1198号)
学位授与の日付	平成24年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	Effects of professional oral health care on reducing the risk of chemotherapy-induced oral mucositis DOI 10.1007/s00520-014-2282-4
掲載雑誌名	Support Care Cancer 第22巻 11号 2935-2940頁 2014年
論文審査委員	(主査) 片倉 朗教授 (副査) 井上 孝教授 柴原 孝彦教授 柳澤 孝彰教授 東 俊文教授

## 論文内容の要旨

### 1. 研究目的

近年、がん治療は、めざましい進歩を遂げている一方で、治療による副作用や合併症も少なくない。がん治療における化学療法の約40%の患者の口腔内に副作用が生じ、そのうちの約半数は口腔粘膜炎が強く発症することにより、がん治療の延期や投薬量の変更が余儀なくされるとの報告がある。本研究は化学療法施行患者に対して専門的な口腔管理を行うことの有用性を検討することを目的に行った。

### 2. 研究方法

乳癌で化学療法を適応する患者26例を対象とし、無作為化比較試験を行った。評価項目として口腔内写真撮影、プラークコントロールレコード(以下PCR)、サクソテスト、オーラルアセスメントガイド(以下OAG)、有害事象共通用語基準のグレード評価(口内炎グレード評価)を行い、化学療法開始前より2週間ごとに評価し化学療法終了まで実施した。専門的口腔管理群ではスクーリング、専門的歯面清掃、ブラッシング指導、栄養指導、生活指導を術前より1週ごとに化学療法終了まで実施した。対照群は、化学療法開始前にブラッシング指導、栄養指導、生活指導のみを実施した。

統計学的検討は、専門的口腔管理群、対照群に対し、化学療法前と化学療法2週間後を比較し、それぞれの項目に対し、Mann-Whitney U検定と $\chi^2$ 検定を用いた。また、統計学的検討にあたり、統計ソフトはSPSSver19(IBM社製)を使用した。

### 3. 研究成績および考察

専門的口腔管理群の口腔粘膜炎の発症者は有意に対照群に多く認められた。また、口腔粘膜炎の指標として用いたOAGによる評価値も専門的口腔管理群の方が有意に低値であった。

### 4. 結論

今回の検討では、OAG、PCRからも、専門的口腔管理群は対照群に対し、口腔内の環境の悪化はほとんど見られないのに対し、対象群では悪化していた。この結果より化学療法開始前から専門的口腔管理を行うことで口腔粘膜症状を軽減することができ、専門的口腔管理の有効性が示唆された。

今後、がん治療におけるチーム医療に歯科医師、歯科衛生士が積極的に関与する必要があることを支持する

結果となった。

以上より本研究で得られた結果は、今後の歯学の進歩、発展に寄与するところ大であり、学位授与に値するものと判定した。

### 論 文 審 査 の 要 旨

本審査委員会は平成24年2月6日、主査片倉 朗教授、副査井上 孝教授、柴原孝彦教授、柳澤孝彰教授、東 俊文教授で行われた。まず齋藤寛一大学院生より論文内容の概要について次のように説明された。

本研究は乳癌患者の術前化学療法による副作用である口腔粘膜炎に対して、治療前ならびに治療中に専門的な口腔管理を行うことの有用性について検討することを目的に行った。その結果、口腔粘膜炎の発症は専門的に口腔管理を行った群の方がセルフケア群と比較して有意に低かった。また、口腔粘膜炎の指標として用いたオーラルアセスメントガイド(OAG)による評価値も専門的口腔管理群の方がセルフケア群と比較して有意に低値であった。今回の検討では、OAG、プラークコントロールレコード(PCR)からも専門的口腔管理群は口腔内の環境の悪化はほとんど見られないのに対し、セルフケア群では悪化していた。この結果より化学療法開始前から専門的口腔管理を行うことで口腔粘膜症状を軽減することができ、専門的口腔管理の有効性が確認された。

概要の説明後、本論文に対する質疑応答および臨床修練の内容について口頭試問が行われた。審査委員より、1) 乳癌を対象とした理由とその化学療法の種類の差により粘膜炎の発症に差があるか、2) 既存の歯周炎にはどのように対処したか、3) がん患者に対する専門的口腔管理の有用性は既に報告されているが本研究を行ったことの意義について、4) 本研究において評価者と専門的口腔管理の実施者は標準化されているか、などの項目について質問があった。1) については本邦では乳癌に対する化学療法はエビデンスがある標準治療が確立されていて治療方針が一定し、本研究はUICCの病期分類でステージⅢ以下の根本治療を目的とした術前後の化学療法患者を対象とした。また化学療法による口腔粘膜炎の発症はSonis STらにより抗癌薬の種類によって差はないことが報告されている。2) については著しい歯槽骨の吸収を認める重度歯周炎で動揺している歯は化学療法前に抜歯を行った。3) については白血病における専門的口腔管理の重要性については既に米山らにより報告されているが、乳癌などの固形がんに対する化学療法で発症する口腔粘膜炎への専門的口腔管理の有用性について前向き研究の先行報告はないため本研究を行った。4) については本学市川総合病院の口腔ケアチームに所属し評価基準にコンセンサスが得られている歯科医師が評価を行い、その指示に従い専門的口腔ケアを同チームに所属する歯科衛生士が行った。以上、おおむね妥当な解答が得られた。さらにその他、論文の記述方法や表の体裁の訂正などについて指摘いただき修正を行った。また、口腔粘膜炎に対してのGCS-F製剤の治療効果等、臨床についての質問がありこれについても妥当な解答が得られた。

以上により本研究ならびに本コースの研修で得られた結果は、今後の歯学の進歩、発展に寄与するところ大であり、学位授与に値するものと判定した。